

令和4(2021)年 2月 7日

学位（博士・言語教育学）申請論文 審査報告書

〈学位申請者〉氏名 EMAN MOHYELDIN TAHA SINOUSY 学生番号 G5D5052021

〈論文題名〉非漢字系日本語学習者のための日本漢字の字体・字形分析と学習法

〈審査委員〉

主査 拓殖大学外国語学部教授 小林 孝郎

副査 東京大学名誉教授 向井留実子

副査 拓殖大学外国語学部准教授 中村かおり

I. 論文の主旨

本論文は、非漢字系日本語学習者にとってもっとも困難な学習の障壁とされる漢字学習について、現在行われている「形・音・義」と用法や語彙の学習を短期間で同時に進める教授・学習法に対して、漢字の知識がゼロから出発する学習者の立場に立ち、最終的には、新たな漢字認識システムと漢字学習法の確立を目的としたものである。

母語で慣れ親しんできた音声・意味の二者関係である「表音文字体系」から、形態が加わった三者の関係である「表意文字体系」に、事前のトレーニングなしに投入される非漢字系学習者が直面する漢字障壁の現状を、「ムリ・ムダ・ムラ」の削減という観点から「現在の日本の漢字」を分析することによって、新たな字形分析・分解法を検討し、実践で用いるために開発した「字形コード」を提示した。また、この「字形コード」を基に、以下の「学習法、漢字の複雑性、筆順」の三課題について論じた。

学習法については、従来、学習初期段階から導入されてきた「字源」や「音・義」の情報には一切触れずに、学習者自身が活用できる「KANJI IN 6&4:漢字導入コース・字形学習法」を提案した。

漢字の「複雑性」を客観的に計量し規定するために、物理的要因と視覚的要因による「漢字の重さ」による数値化を試みた。

例外が多数で論理性に欠ける「筆順」についても検討し、非漢字系日本語学習者に適合した「学習用の筆順」の必要性と理論的枠組みを論じた。

II. 論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

序章 目的と構成

第1節 本研究の目的

1. 現在の「日本の漢字」の分析
2. 新たな漢字学習法の確立（「ムリ・ムダ・ムラ」の削減）

第2節 本研究の全体構成

第1章 日本漢字の歴史及び漢字教育の現状

第1節 長い時間を経て現在の日本漢字へ

1. 漢字の由来：中国から日本へ
 - 1-1 中国での漢字の由来
 - 1-1-1 中国古代から由来段階
 - 1-1-2 漢字の造字法及び構成原理
 - 1-2 日本への漢字の伝来
 - 1-2-1 中国の漢字を日本が受容した時期
 - 1-2-2 漢字の和化

1-2-3 現在の日本語の漢字

2. 日本漢字の特徴：字体・字形について

2-1 字形と意味の関連

2-1-1 表意文字と表語文字

2-1-2 意符「意味を示す要素」

2-1-3 二字漢語の意味理解

2-2 漢字の階層的構造

2-2-1 線型分解と階層分解

2-2-2 部首システム

2-3 字形の複雑性

2-3-1 物理的複雑性及び計量的複雑度

2-3-2 主観的複雑性及び被験者の複雑度

2-3-3 字形の複雑性の要因

2-4 字形と筆順

2-4-1 筆順の役割

2-4-2 『筆順指導の手びき』による筆順の原則

2-4-3 筆順の歴史

2-4-4 筆順の課題

第2節 日本漢字の字形学習

1. 字形学習の問題点：字形の認識

1-1 非漢字系学習者の書き誤りから見る認識の問題

1-2 非漢字系学習者への必要な指導の内容

2. 字形学習の問題点：現状の字形学習

2-1 母語話者への漢字教育と成人の外国人学習者への漢字教育

2-2 学校教育における「書写」

2-3 日本語教育における「字形の学習法」

第2章 これまでの日本漢字の字形分析

第1節 これまでの字形の構造分析

1. 基本線/基本画への分解レベル

1-1 国際規格の文字コード「ユニコード」

1-2 ヴォロビヨワの24種類の書記素

1-3 書写教育の15及び20種類の「基本点画」

1-4 宮下の「十の画」

1-5 小学校の「あたらしいしょしゃ」(2020)

2. 基本形/基本部への分解レベル

2-1 齋藤(2006)の449種類の部品

2-2 ヴォロビヨワ(2014)の部首及び準部首(202種+220種)

2-3 Heisig(1977, 2002)の229種のPrimitive(元素)

2-4 宮下(1989, 2000)の101の基本漢字

2-5 早川他(2019)の漢字部品及び非漢字部品(101種+57種)

第2節 これまでの字形の構造化の解説

1. 基本線/基本画の結合

1-1 藤村(1973)のアルファベットコード

1-2 小学学校の「あたらしいしょしゃ」(2020)

2. 基本形/基本部の組み合わせ

2-1 Halpern(1990)の代表的4型の分類

2-2 林大(1979)の分解し難い漢字の分類

第3章 本研究の構造分析及び構造化の解説

第1節 本研究の「分解概要」と「分解基準」

第2節 日本漢字の構成要素(基本要素)の4分類

1. 6つの基本線

1-1 スタイルオプション:「サイズ」と「ハネ」

2. 漢字の基本形

3. 漢字の基本部

4. 漢字の複合部

第3節 日本漢字の構造化

1. 基本線レベルの構造化

1-1 4つの結合タイプ

1-2 1画ルール その1

2. 基本形及び基本部レベルの構造化

2-1 6つの配置ポジション

2-2 1画ルール その2

第4章 字形構造を解説する「字形コード」

第1節 これまでの漢字字形のコードとその目的

1. 字形の複合構造を記述する文字「藤村(1973)のコード」

2. 辞書の検索に利用する「Halpern(1990)の4型コード(SKIP)」

3. 漢字のデータを分析する「ヴォロビヨワ(2014)の3種類のコードシステム」

4. 字形の学習法として利用する「タハ(2015, 2020)のアルファベットと数字コード」

第2節 本研究の漢字字形コード「Kコード」

1. 基本線のアルファベットコード

2. 基本形構造を示す数字コード

3. 基本部のポジションコード

第5章 本研究の字形分析及び字形コードの実用化 その1

第1節 KANJI IN 6&4：漢字導入コース・字形学習法

1. 「KANJI in 6&4」のコース内容
2. Step 1の「基本線レベル」
3. Step 2の「基本形レベル」
4. Step 3の「基本部レベル」
5. Step 4の「複合部レベル」

第2節 「KANJI in 6&4」の特徴及び教室内での利用メリット

第3節 「KANJI in 6&4」実践例

第4節 「KANJI in 6&4」の実績

第6章 本研究の字形分析及び字形コードの実用化 その2

第1節 字形の重さ：字形の複雑性の計算法

1. 字形の特徴及び複雑性の要因を変数とした複雑性の計算
 - 1-1 物理的要因の変数 Number “N”
 - 1-2 視覚的要因の変数 Value “V”
2. 字形の「連結性」と「字形の重さ」の計算式
 - 2-1 要因との間の関連：「連結度」の規定
 - 2-2 要因と全体構造の関連：「字形の重さ」の計算式
3. これまでの「字形の複雑性」と「字形の重さ」の比較

第7章 本研究の字形分析及び字形コードの実用化 その3

第1節 字形コードを利用した「新筆順」

1. 筆順原則の再検討
2. 字形学習用の「新筆順」

終章 本研究のまとめ

参考文献

参考資料

III. 本論文の概要

序章 目的と構成

序章では、本研究の目的を述べ、論文の全体構成を示している。

第1章 日本漢字の歴史及び漢字教育の現状

第1章では、漢字の由来及び日本への伝来の流れについて概観し、長い時間を経て形成された現在の日本漢字の特徴を、字体・字形の特徴を論じることを中心に、漢字の階層的構造、字形の複雑性及び筆順について、先行研究を整理し論点を明らかにしている。また、非漢字系日本語学習者の漢字認識・字形学習において、どのような問題点があるかについ

て論じている。

非漢字系日本語学習者に対して、先行研究における共通の指摘は、この字形の認識力を高めることの必要性であるが、そのためには、書記素・構成要素の種類と特性、正しい形や書き方、構造規則などの学習方法を確立すべきであることを述べている。

第2章 日本漢字の字形分析

第2章では、これまでの字形分析及び分解方法について、「基本線/基本画」から「基本形/基本部」までの分解レベルによって整理し、問題点を検討している。さらに、先行研究に見られる漢字字形の結合や組み合わせを「構造化」という視点からを検討し分析している。

第3章 本研究における構造分析及び構造化

第3

— |

ノヽレリ

また、漢字の構造化（結合方法）についても、基本線→基本形レベルでは「接点、接点の角の数、1画ルール」を、基本形→基本部レベルでは「配置ポジション、1画ルール」を用いての合理的説明を試みている。

第4章 字形構造と「字形コード」

第4章では、先行研究に見られる構造分析及び字形コードの目的や成果について述べた後、前章で展開された字形の分解及び構造の方法を学習者に実践的に説明するための「字形の解説方法及びツール」である本研究における「字形コード（Kコード）」について論じている。

ここでは、「6つの基本線」に与えた「HIZNVL」のアルファベットコードを中心に、「サイズ（長短）」と「跳ね（有無）」の2つのオプションに与えられたコード（「短形にアルファベット小文字」「跳ね形に「w」）、1画ルール（一画で書く基本線に下線を付す。例「力：HZwZ」）を用い、さらに基本形構造を数字コードで示す方法（例「十：H4I」）を述べ、さらに基本形が構造化した基本部についても6つのポジションコードで提示して、実用化へ向けた漢字の重層的な構造の単純化を試みている。

第5章 本研究の字形分析及び字形コードの実用化 その1

第5章では、本研究の字形認識およびライティング指導法としての「KANJI in 6&4」について論じている。「KANJI in 6&4」は、本論文で述べられてきた「基本線・基本形・

基本部・複合部」レベルの4つの字形構造段階を、学習者自らが学習できるシステムティックなコースであるが、そのコースの具体的な特徴と内容について述べた後、そのメリットについても論じている。本学別科日本語教育課程で行われている実践報告とその実績についても述べている。

第6章 本研究の字形分析及び字形コードの実用化 その2

第6章では、漢字字形の複雑性を客観的に規定する方法について検討している。先行研究では、画数や要素の数である物理的複雑性や被験者による主観的複雑性が測定されているが、本研究の字形コードを利用し、物理的要因(変数N)と視覚的要因(変数V)を立てて、主観的複雑性の諸要因を計量可能な変数に変更し、字形の複雑性を示す概念として字形の「連結性」も加えて、本論文の「字形の重さ」を測定するための計算式を仮定し、先行研究との比較も含めて論じている。

第7章 本研究の字形分析及び字形コードの実用化 その3

第7章では、現状の筆順の問題点を検討し、非漢字系日本語学習者向けの字形学習用の新たな筆順の単純化規則「学習用の筆順」(「新筆順」)について検討している。非論理的で例外が多いとされるこれまでの筆順規則に対して、「美しく整えた字を書くこと」や「覚えやすくすること」を目的として、本論文の「字形コード」を用いた理論的な枠組みを提案している。

終章 本研究のまとめ

本章では、本研究の目的について再度確認し、本論文各章で論じた内容についてまとめている。

以上が本論文の概要である。

IV. 論文の総合評価

論文提出までの経緯

学位申請者は、2015年4月に本学言語教育研究科博士後期課程言語教育学専攻に入学し、2020年度に1年間の休学後、2021年4月に復学し現在に至っている。これまでに、修了に必要な10単位以上を取得し、外国語(日本語)検定試験にも合格している。

博士論文完成発表会は、2021年7月24日に実施され、論文は2021年12月18日に提出し受理されている。論文提出時の業績は、論文及び学会等における口頭発表が計6本である。

論文の審査結果

審査委員による論文審査会を2022年2月7日午前に行い、審議の結果、全員一致で「合格」とし、続いて同日午後、最終試験（口述試験）を実施し、審議の結果、全員一致で「合格」と判定した。

V. 審査所見

本論文は、非漢字系日本語学習者の漢字学習において、困難さや学習負担が集中する字形認識を左右する重要な技能である、識別・弁別力と書写力を高めるための、新たな漢字認識システムと漢字学習法を提示したものである。

非漢字系日本語学習者にとって漢字学習は、日本語学習の中でも高いハードルと目されている。それに対して本論文の立場は、学習者経験を持つ申請者自身の発想によるものである。そこでは、日本語の母語話者には持ち得ない漢字認識を拠り所とした、独自の分析視点が用いられており、既存の枠に捕らわれない、独創的な漢字学習法へと至る考察過程を細部に亘って論じたものになっている。

ー | ノ \ / L

第4章では、前章の「基本線及びそのオプション形と結合タイプ」をアルファベットと数字を用いてコード化し、漢字学習の要点について共通認識を通じた対話を容易とすることが教室の内外で可能となるような汎用性を持たせた点に、従来の漢字指導・学習研究において到達しえなかった成果を認めることができる。

こうした理論的で実践的な枠組みを、第5章では、「字形認識およびライティング指導法である「KANJI IN 6&4」コースとして構想し、その詳細について論じている。この試みはきわめて実践的で実用的なものであり、国内外の多くの日本語教育現場において活用が期待されるものである。この漢字認識システムと、それに続く学習法は、導入期もしくは漢字学習を始める前に、学習者が字形そのものを識別できる手段として学ぶものであるが、日本語の教室内で実際に、類似の漢字や共通の要素を持つ漢字を容易に識別でき、判別可能な漢字を書写できるようになることは、本学別科日本語教育課程での実践として、本章末に触れられている。

続く第6、7章では、それぞれ漢字の「複雑性」と「筆順」について、学習者視点を取り入れた議論がなされている。そこでは、非漢字形日本語学習者の漢字障壁を「ムリ・ムダ・ムラ」の削減によって実現するという、本論文の前提に立った論考が前章の学習法に続いて展開され、「複雑性」については「漢字の重さ」の数値化、「筆順」については学習者用の「新筆順」が提示されているが、いずれも独創性という点で今後の研究の進展が期

待されるところである。

審査委員からは、この論文は、「6 & 4」の内容、その応用という点で、申請者にしか論じることのできないオリジナリティーを持つ意義ある研究であり、当該学術分野への貢献度も大きいであろうなどの肯定的評価を受けたが、一方で、様式の不統一、資料、先行研究の示し方の不正確さ、内容的な繋がり不明確な点がある等の指摘があった。これらの点については、申請者も認識しており、最終論文提出までに加筆・修正を行うこととした。

審査所見をまとめる。本論文は、「大学院学位論文審査基準」（「博士論文審査基準」）に照らして、①研究テーマ、③研究方法、のいずれにおいても、おおむね適切・妥当なものであり、⑥論文の内容について、独創性を有すること、当該学問分野の研究に貢献をなすものであることは、上に述べたとおりである。また、②先行研究・文献資料・調査などの情報収集、④論旨、⑤全体の構成、日本語表現については、上述したように若干の修正を加える必要があるが、おおむね妥当であると認められ、全体として「論文」としての体裁が整っているものと判断する。また、この研究テーマをさらに発展させて研究を続ける意図も明確であり、将来の研究者としての活躍に期待するところは大きい。

学位申請者は現在、アラビア語母語話者として、その日本語能力を生かし、ゲーム翻訳の仕事に従事しているが、将来的には、出身地であるエジプト・カイロ大学の日本語・日本語教育専攻の教員としての活躍が期待され、彼の地では、その将来が強く嘱望されている。また、高等教育機関で教育者・研究者として活躍していく能力及び学識に加え、本論文で示した突出した発想力を兼備した優れた人材であることは言を俟たない。

VI. 審査委員会結論

以上により、本審査委員会は、慎重・厳重な審査の結果、総合的に判断し、3委員全員が一致して、学位申請者に対し、「博士（言語教育学）」の学位を授与するに値するものと認めた。